

1 気象概況（9月前半：果樹研究所）

9月第1～3半旬の平均気温は、23.7℃で平年より1.1℃高く経過しました。この期間の降水量は173.0mmで平年の219%、日照時間は平年の117%でした。

2 土壌の水分状況

9月16日時点の土壌水分（pF値：果樹研究所なしほ場：草生・無かん水）は、深さ20cmで2.0、深さ40cmで1.9、深さ60cmで1.8となっていて、適湿状態にあります。

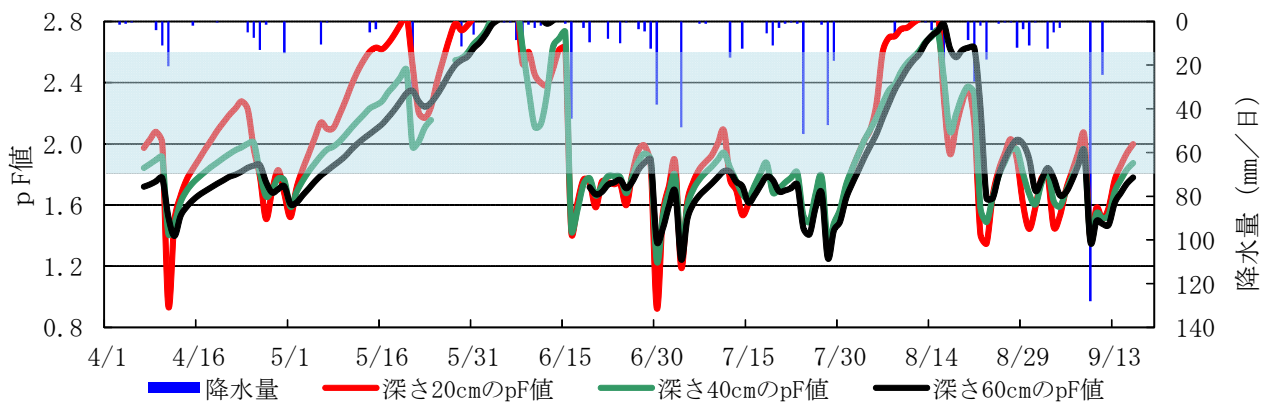


図1 土壌pF値の推移（果樹研究所なしほ場：草生・無かん水）
 図中の網掛け部は、適湿の範囲（pF1.8-2.6）を示す

3 生育状況（9月17日時点：果樹研究所）

(1) なし

ア 主要品種の収穫期と果実品質

「豊水」の収穫始めは9月4日で平年より9日早まりました。糖度は「幸水」が11.3と平年より低く、「豊水」が12.5、「二十世紀」が10.2となっています。

表1 なし主要品種の収穫期と果実品質

品種	収穫始(月/日)			収穫盛(月/日)			収穫終(月/日)			果実重(g)			糖度(° Brix)		
	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
幸水	8/21	8/25	8/20	8/23	8/31	8/23	8/26	9/6	8/27	403	380	365	11.3	12.6	12.7
豊水	9/4	9/13	9/4	未	9/19	9/8	未	9/25	9/18	未	429	307	12.5	12.8	14.4
二十世紀	9/11	9/18	9/11	未	9/22	9/13	未	9/27	9/18	未	401	424	10.2	11.2	11.6
ラ・フランス	未	10/6	9/27	未	10/7	9/27	未	10/9	9/27	未	294	275	未	12.9	12.9

注) 平年値は、1986～2015年（ラ・フランスは1987～2015年）の平均値 未は未確定。下線は参考値

イ 「ラ・フランス」の成熟経過

「ラ・フランス」の満開後150日（9月17日）における成熟調査の結果は、果実硬度が10.5ポンドで平年より低く、デンプン指数は平年よりやや高く経過しています。また、糖度は11.3でした。

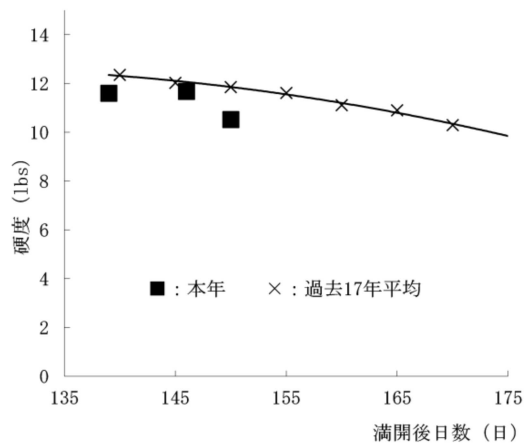


図2 「ラ・フランス」の果実硬度の推移

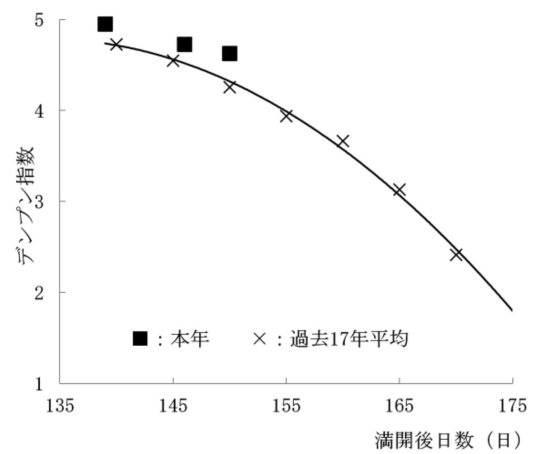


図3 「ラ・フランス」のデンプン指数の推移

(2) りんご

ア 果実肥大状況

果実肥大を暦日で比較すると、「ふじ」は縦径が76.2mmで平年比101%、横径が83.4mmで平年比101%と平年並で、満開後日数による比較でも平年並の状況です。

イ 「ふじ」の裂果発生状況

9月11日現在（満開後132日）の「ふじ」/マルバ台果実の外部裂果率は10.1%、裂果発生率は43.9%でした。

表2 「ふじ」の裂果発生状況

調査樹	樹齢	外部裂果率 (%)			裂果発生率 (%)		
		2019	2018	2017	2019	2018	2017
ふじ/マルバ台	17	10.1	5.0	1.7	43.9	28.3	38.3

注) 調査規模：目通り付近から、樹あたり20果を採取した

外部裂果率：つる割れ、浮皮等の割合、裂果発生率：外部裂果及び内部裂果の割合

(3) ぶどう

ア 「巨峰」及び「高尾」の収穫期と果実品質

今年の「巨峰」の収穫始めは、有核栽培では9月4日で平年より1日遅く、無核栽培では9月6日で平年並でした。「巨峰」（有核栽培）の果実品質は、果皮色（カラーチャート指数）、糖度ともに平年並、酒石酸含量は平年より低くなりました。

「高尾」の収穫始めは9月4日で平年より7日早まりました。「高尾」の果実品質は、糖度、酒石酸含量ともに平年並でした。

4 栽培上の留意点

(1) もも

ア 秋肥の施用

収穫後、9月のできるだけ早い時期に秋肥を施用し、樹勢の回復と貯蔵養分の蓄積に努めましょう。秋肥は尿素を中心に速効性肥料を用い、窒素成分で7kg/10a程度（「あかつき」：中肥沃度地帯の場合）を施用します。

樹勢の低下が見られる樹では分肥とし、窒素成分で秋肥を6～7割程度、春肥を3～4割の施用量とします。また、樹勢が旺盛で、新梢の二次伸長の著しい樹には、枝の充実を促すために施用を控えましょう。

イ 秋季せん定

秋季せん定は、以下を参考に樹勢に応じて行いましょう。また、モモせん孔細菌病の防除効果を高めるためにも実施しましょう。

(ア) 樹勢が強く徒長枝の発生が多い場合

9月中旬頃（徒長枝が太る前）を目途に収穫が終了した品種から秋季せん定を実施し、花芽の充実と樹勢の安定化、秋期防除における薬液透過の改善を図りましょう。

(イ) 樹勢が適正な場合

主枝や亜主枝の生育を妨げる徒長枝を整理し、樹勢の乱れを防ぎましょう。

(ウ) 樹勢が弱い場合

秋季せん定は最小限とし、葉芽の多い中果枝や長果枝を多く配置することで、樹勢の回復を図りましょう。

(エ) 若木及び幼木の場合

若木では、樹勢が適正な場合と同様の方法とします。特に、幼木から若木時代の冬季の強せん定は寒凍害を招きやすいので、冬季に大きな切り口を作らないように、秋季せん定時に主幹部の強勢な枝を整理しましょう。

(オ) モモせん孔細菌病の発生が多く見られる場合

菌密度の低減を図るために、樹勢を乱さない範囲で秋季せん定を実施することが効果的です。秋期防除前には秋季せん定を行い、ボルドー液がムラなく散布されていることを確認し、薬液の到達を妨げる枝がある場合は、再度見直して除去するなど、防除効果を高めるよう工夫しましょう。



図4 ボルドー液の散布ムラ
斜線上側には薬液が到達していない

(2) な し

ア 「あきづき」、「ラ・フランス」の収穫

満開後144日現在、果樹研究所内「あきづき」の地色指数は3.1で平年（地色指数2.7）を上回っていますが、果皮中のクロロフィル含量は平年に比べて多い状況にあります。

「あきづき」は、日本なし地色用カラーチャートで地色指数が4を超えると糖度は高くなるものの硬度が低下してシャリ感が消失する傾向が認められるため、果実の糖度や食味の点で優れる地色指数3.5～4で収穫するよう努めましょう。

また、「ラ・フランス」の収穫基準は表3を参考にし、収穫が遅れないように留意しましょう。

表3 「ラ・フランス」収穫適期の新たな基準

	生育日数 (日)	地色 指数	硬度 (lbs.)	デンプン 指数
新たな基準	160～165	3.0	11	3.0～3.5

注)平成28年度農業総合センター普及成果情報

イ 秋肥の施用

中生種以降の品種では落葉までの期間が短いので、収穫期中盤から収穫直後に実施しましょう。窒素肥料は速効性肥料を用いて行い、肥持ちの悪い土壌や有効土層の浅い土壌では速効性と緩効性のものを組み合わせて施用しましょう。

(3) りんご

ア 中生種の収穫前管理と収穫

落果防止剤の散布、着色管理および収穫等の作業が遅れないようにしましょう。なお、落果防止剤の使用に当たっては、収穫前日数に注意しましょう。

収穫は、食味（果実硬度、デンプン等）や地色の推移に十分注意し、適期収穫に努めましょう。

イ 「ふじ」の栽培管理

反射シートの敷設や摘葉等の収穫前管理は遅れないように実施しましょう。

「ふじ」の摘葉を9月下旬頃から実施する場合は、1回目は果実と接触している葉を中心に数枚程度を摘葉し、10月中旬に玉回しと合わせて再度実施しましょう。

ウ 秋肥の施用

秋肥は、マルバ台樹では9月下旬～10月上旬、わい性台樹では10月上旬に施用しましょう。窒素肥料は速効性と緩効性のものを組み合わせ、有機物肥料は分解に時間がかかるため、秋施用としましょう。

(4) ぶどう

ア 収穫における留意点

収穫が遅れると脱粒や果肉が柔らかくなるなど果実品質の低下を招くおそれがあるため、適期収穫に努めましょう。

イ 秋肥の施用

収穫後の9月中旬頃は秋根が活発に伸びる時期で養分吸収も盛んであるため、秋肥を施用し、来年の貯蔵養分を蓄積させましょう。ただし、新梢の遅伸びにも影響するので、自園での新梢の停止状況、葉色、新梢の登熟程度などをよく観察して施肥の量を判断しましょう。

施肥は尿素を中心に速効性肥料を用いて、窒素成分で2kg/10a（年間施肥量の3割程度）を目安に施用します。

なお、樹勢が強い樹、葉色が濃く、遅伸びしているような新梢が多い樹では、秋肥の施用を控えます。

5 病虫害防除上の留意点

(1) 病 害

ア りんごの各種病害

9月上旬における褐斑病の発生圃場割合は、県内全域で平年よりやや高い状況にあるため（令和元年9月17日付け病虫害発生予察情報・発生予報第7号、以下予察情報第7号）、今後の発生に注意が必要です。さらに、9月中旬以降、降雨により湿度が高い状態が続くと、すす点病、すす斑病の防除が必要となります。

また、炭疽病が認められる場合、二次感染により発生が拡大するおそれがあるため、罹病果は見つけ次第速やかに除去しましょう。

防除薬剤は、晩生種を対象にオーソサイド水和剤80 600倍、またはストライド顆粒水和剤 1,500倍を使用します。なお、農薬の総使用回数と収穫前日数に注意しましょう。

イ モモせん孔細菌病

9月上旬におけるモモせん孔細菌病の新梢葉での発生ほ場割合は、平年よりやや高い状況です（予察情報第7号）。今後の台風等の影響により、9月中旬から下旬に降水量が多いと翌春の春型枝病斑の発生が多くなる傾向にあるため、秋期防除を確実に実施することで越冬菌密度の低下を図りましょう。

防除薬剤は4-12式ボルドー液またはI Cボルドー412 30倍を使用し、9月上旬～10月下旬に2週間間隔で3回散布します。なお、これらの剤にかえてクレフノン 100倍加用コサイド3000 2,000倍、またはクレフノン 100倍加用ムッシュボルドーDF 500倍を使用してもかまいません。ただし、コサイド3000は高温時に使用すると落葉等の薬害を生じること

があるので注意しましょう。

ウ ナシ黒星病

9月上旬における新梢葉での発生ほ場割合は、浜通りで平年よりやや低かったが、中通りでは平年よりもやや高い状況にあるため（予察情報第7号）、注意が必要です。

今年、ナシ黒星病の発生が多かった園では、越冬菌密度の低下を図るため、「豊水」収穫後に2回目の秋期防除を必ず行いましょう。

防除薬剤は、オーソサイド水和剤80 600倍、またはベルコート水和剤 1,000倍を使用し、散布の際は予備枝等の新梢先端まで薬液が十分量到達するように散布しましょう。

(2) 虫 害

ア コスカシバ

被害が多いもも園では、収穫後（9月中旬～下旬）にスプラサイドM 200倍、またはトラサイドA乳剤 200倍を樹幹部及び主枝に散布しましょう。

イ 樹上越冬害虫

ナミハダニやカイガラムシ類などの樹上越冬害虫を誘殺するため、9月下旬頃に枝幹部に麻袋や飼料袋などを巻き付けてバンド誘殺を行い、2月上旬に取り外して適正に処分しましょう。

気象庁[営農活動に役立つ気象情報] <http://www.jma.go.jp/jma/kishou/nougyou/nougyou.html>

病害虫の発生予察情報・防除情報

病害虫防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

URL: <http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 技術革新支援担当 TEL 024(521)7344

(以下のURLより他の農業技術情報等をご覧ください。)

URL: <http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>